殺人犯の使用したものに対する不快感

○奥本愛佳　小谷彩華　西村聡生
(安田女子大学心理学部)

目的

人は、物理的な汚れだけではなく、精神的な汚れからも不快感を覚え、不合理な判断をすることがある。エイズ患者が着用したセーターを洗濯後に着用することを想定することは、現実には感染の恐れは無いにもかかわらず、単に所有されていた場合よりも不快であると報告され、着用期間が長くなるとより不快に感じ、セーター着用後の時間経過では不快感は軽減しなかった（Rozin et al., 1992）。一方、自分がセーター着用後にエイズ患者に着用されると想像しても不快感は無かった。

本研究では、物理的な感染や汚染の可能性が全く無い一方で、精神的な汚染源とされる可能性のある対象として殺人犯を設定した。殺人犯女性が着用していたコートに対する不快感について、所有と使用、使用期間、使用からの時間経過の観点から検討する。加えて、自分が着用したコートが後に殺人犯女性に着用されることに対する不快感について検討する。

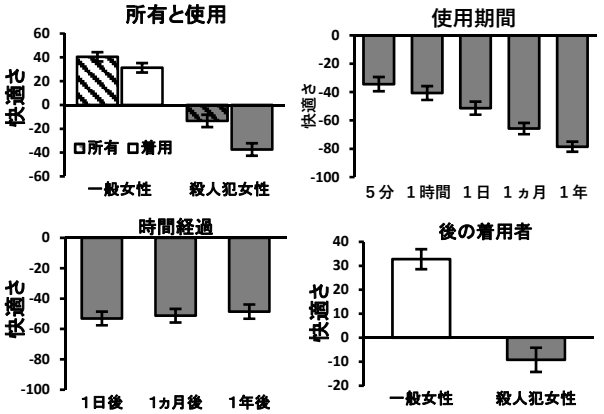
方法

安田女子大学生 112 名が、以下の各状況を想定してコートを 1 日着用すると想像した際の気分の快、不快感を+100 から-100 の範囲で 0 を快不快なしとして評定した。なお、殺人犯女性は犯行時にはそのコートを着用していないとした。まず、誰かが所有していたコートをクリーニング後に自分が着用すると想定し、所有者が一般女性または殺人犯女性、所有者は着用したことがないまたは 1 日着用したそれぞれの場合について評定した。続いて、殺人犯女性が 5 分、1 時間、1 日、1 ヶ月、1 年頻繁に着用したコートを、また殺人犯女性が 1 日着用してから 1 日後、1 ヶ月後、1 年後にそのコートを、着用することを想定して評定した。最後に、自分が着用後古着屋に売却し、それを一般女性または殺人犯女性によって着用されると想定して評定した。各参加者はすべての想定について回答した。

結果

所有と使用に関して（図 1 左上）、所有者（一般女性、殺人犯女性）と接触度合い（所有、着用）を参加者内要因とした分散分析の結果、殺人犯の方が（$p<.001$）、また着用される方が（$p<.001$）不快であった。交互作用も有意（$p<.001$）で、殺人犯女性の方が着用による快適さの低下が大きかった。使用期間（図 1 右上）を要因とした反復測定分散分析は有意（$p<.001$）で、着用期間に伴い不快感は強まった。時間経過（図 1 左下）を要因とした反復測定分散分析は有意でなく（$p=.088$）、着用から時間が経過しても不快感は変化しなかった。後にそのコートが着用されること（図 1 右下）に関して t 検定を行った結果、後に殺人犯女性に着用されると想定する方が不快だった（$p<.001$）。

図 1. 所有と使用（左上）、使用期間（右上）、時間経過（左下）、後の着用者（右下）に関する快適さの評定値。エラーバーは標準誤差。



考察

使用による不快感の大きな増加、短時間の使用での不快感の発生と使用期間に伴うその増大、いったん使用されると持続的であるといった、殺人犯の使用したものを使用することに伴う不快感の性質は、概ね Rozin et al.（1992）の報告と一貫しており、殺人犯の使用物の使用による何らかの精神的な汚染への不合理な恐れを反映していると考えられる。

本研究では Rozin et al.（1992）と異なり、自分が着用した後に殺人犯に着用されることによる逆行的不快感が観察された。殺人犯と物を共有することへの忌避感は、そもそも物質的基盤を持たないと考えられることから、物理的性質に制約されにくいのかもしれない。